情報かわらばん

田麦山に夢と誇りをつくる 500人プロジェクト通信

NO. 13

田麦山復興デザイン策定事業
2011.3.1-2012.2.28

2011年2月28日発行　通算13号

発行：田麦山地区連絡会　編集：田麦山に夢と誇りをつくる500人プロジェクト編集チーム

プロジェクトを見える化・現場の声が情報源・わかりやすく編集

夢で羽ばたく田麦山。夢は、見るもの？　つくるもの？　誇りは、あるもの？　育てるもの？　それとも、思い出すもの？　わき出すもの？　答えはあなたの中に。

田麦山みんなの焦点を合わし、気持ちを一つにするために組織のあり方を本音で語り合った一晩。

二〇一一年二月二十四日（金）
定例会

平成22年度から始まった田麦山復興デザイン策定事業は今年度で終わりとなります。最後の会合が2月24日、田麦山公民館にて開かれました。

テーマは、来年度から具体的な活動を始めるために、住民のみなさん一人ひとりの声が反映され、参加しやすい組織をどのようにつくっていくか。今までは連絡会という組織が中心となって進めてきましたが、「連絡会という名前では、主旨がわかりにくい」「新しいことを始めようという意識が生まれない」「協議会と連絡会の位置づけがあいまいだ」などの提案や声があり、連絡会の組織の見直しを図ることになりました。

「住民の合意を図り、地区全体を上げてまちづくりに取り組みたい」「田麦山を良くしたいと願う人たちが中心になって活動をしてほしい」「10、20年後を見据え、多数ある団体を整理して、進むべき方向を一つに定めていきたい」など前向きな意見も飛び交いました。

まちづくりは、そこに住む一人ひとりの方が主役です。田麦山に住む人の声が反映される協議会の力を借りながら、どうしたらみんなの気持ちが一つになり、理念である「楽しく住める田麦山」を実現することができるのか。みなさんの想いや力を活かせるような組織や事業内容を定め、来年度から気持ち新たに、良いスタートが切れるように進めていきます。

『お茶飲み、おしゃべりはいろんなことが解決していく場』

沖縄の朝ミーティング ゆんたく=おしゃべり

78歳のおばあが、百歳のおばあと暮らしている家。平屋で縁側があります。調べると沖縄の伝統的な民家は、〝内と外との融和〟を意識して造られているのが特徴だとか。ここで、朝、30分のミーティングが行われます。78歳のおばあが毎朝起きると最初に準備するのは、集まってくる皆んなが飲むお茶です。お茶はポットに入れられ、お茶菓子となる黒糖が一緒に用意されます。百歳のおばあを中心にした朝のゆんたく。あるおばあが、「テーブルが壊れた」というとあるおじいが「それなら材料もあるし、午後にでも直してやろう」といいます。あるおじいが「4、5本のキャベツの苗が欲しいんだが」というとあるおばあが「それならうちにある」と返します。「最近あそこのおばあの顔を見ないが・・・」というと、「ああ、おととい那覇に孫の顔を見に出かけたんだ」と安否情報がわかります。お互いの心が通い合ったいろんなことが解決していく場。田麦山にも必要かもしれません。

『みんなで共同出資し、始まった沖縄の共同店。みんなで使えば自分たちに返ってくる』

沖縄・奥共同店 「高いビールは、うまいんじゃ」

沖縄には、その地区に住む人々の共同出資で設立・運営されているお店があります。一番最初にできたのが、奥共同店。一九〇六年のことでした。百年を越える歴史が刻まれています。

お店で売っているビールは、量販店のビールよりも値段は高いですが、結城さんが訪ねた百四歳のおばあは、「高いビールはうまいんじゃ」と語ります。

実はこのお店が出した利益は、この地区のために使われるのです。最初は船を買い、次に村バスを買い、そして奨学金制度をつくりました。発電所も建設しました。

全員出資。村全体で経営し、お金が循環する共同店。奥が深そうです。

2006年、奥共同店がスタートしてちょうど100年を記念してつくられた本。季刊カラカラ別冊。

みんなの拠点

各地の実践から見えてくる魅力

楽しく住める田麦山への示唆

結城登美雄さんの講演会

おしゃべりの場は解決の場。みんながみんなのためにお金を循環させる方法がある。

第二回田麦山学習会

2012年1月28日
田麦山農協支所　二階

『みんなの気持ちが集まる場を考える』
結城登美雄さん
（民俗研究家）

沖縄のおばあ、おじいの話・東北のムラの話

おじい・おばあ50人に「90年、百年生きて、だいじだと思うこと」を聞かせてほしいと、結城登美雄さんはかつて沖縄を周りました。50人のうち47人は『あたい』と沖縄では呼ばれている家の近くにある畑を持っていて、食べものの基盤を自分で持っていました。お茶のみ、おしゃべりは、ひま人がやることだと軽んじてきたけれど、東京とか仙台ではできない『いろんなことが解決していく場』だということがわかりました。
それら沖縄の話の他、東北の村々の実践には大都会ではできない知恵が盛りだくさんでした。

お茶のみ、おしゃべりができるみんなの拠点を各地で見て、そして実践として新たに各地で育んできた結城登美雄さんのお話を聞いていると、田麦山でもできるんじゃないかと勇気が湧いてきます。特に、食を中心にした活動をやっていきたいという声も実際に出てきた学習会でしたから、そのポイントをしっかり押さえておきましょう。

結城登美雄先生
昭和20年山形県出身。民俗研究家。
10年にわたり東北の農山漁村をフィールドワークしながら、住民を主体にした地域づくりの手法「地元学」を提唱。出版界、演劇界、学者、研究者、建築家などとネットワークしながら、宮城県内及び東北各地で地域おこしの活動を行なっている。
「増刊現代農業」「グラフィケーション」など、雑誌や新聞を中心に農と地域づくりについて多数執筆中。「NHK東北ふるさと賞」「芸術選奨芸術振興部門文部科学大臣賞」を受賞。

『共同購入（田麦山全体でまとめ買い）で二倍広がるお得感』

宮城県丸森町・「なんでもや」

東北に生まれた共同店。それが丸森町の「なんでもや」です。

３００戸１０００人のムラから商店が消え、女性の六割は車の運転ができず日々のものを手に入れる困難さだけが残りました。結城さんが沖縄の共同店の話をしたのはそんな頃でした。

有志が一戸一戸すべてまわり「私も出資します。買い続けます。」ということに賛同してくれた人は２１０戸。７割の出資（一戸あたり２０００円）を得て東北の共同店がスタートしたのは二〇〇三年のことでした。

二ヶ月に一回ある年金支給日になるとこの店はお客さんでいっぱいになります。「何でも好きなものを食え」と孫を連れたお年寄りが集まるのです。

そして利益の柱になっているのが、共同購入です。12月、２５００円のクリスマスケーキ共同購入に２００軒から申し込みがあり、３０００円のお正月の刺身共同購入には２５０軒から申し込みがありました。今や共同購入の取引先は１００店にのぼっています。

共同して買うことでいいものが安く入り、そこで生じた利益は地域に返ってくるというおいしさ二倍の共同購入がこのお店の柱となっています。これは田麦山でも可能ではないでしょうか。

『時間限定、数量限定でムリせず食を提供する方法』

青森県弘前市・「がんばっ亭」

食を提供するには荷が重い。しかし、やり方によっては、できる範囲でしかも喜ばれるという方法だってあるのです。

青森県の弘前市にある「がんばっ亭」は、農家のおかあさんたちが手づくりでつくる惣菜が並ぶお店です。

ここは皿に盛られた10品以上のお惣菜から自分の好きなものをチョイスしてお会計へ向かう方式で販売しています。数量限定。無くなったお皿から売り切れ御免です。

他にも時間限定で食を提供してうまくやっている事例もあるそうで、組み合わせて行えば、田麦山でも食を中心とした拠点づくりは十分可能なのではないでしょうか。

食を中心にしたみんなの拠点づくりについて熱く語って下さった結城登美雄先生。

60歳以上を条件としたちょっと働ける場だって田麦山でも夢じゃない。

長野県・小川の庄・おやき

おやき村で有名な旧小川村。ここには女性たちが働きやすい工夫に満ちあふれています。歩いて15分のところに工房があります。30～40戸の農家にひとつの工房がつくられ、車がそれぞれの工房から集荷していく形をとっています。

入社資格は60歳。当初、75歳定年制をとっていましたが、もっと働きたいということで定年なしになったといいます。そのきっかけをつくったおばあちゃんは、78歳で退職。せっかく定年なしにしたのにと引き留める声に、貯めた１２００万円を使うためにやめたいんだと言ったとか。

田麦山にも60歳から働けるところがあったらどんなに充足した生活を送れることになるでしょうか。夢ではありません！

田麦山にもおかあさんたちの食堂ができたらいいね。それには、いっぱい背負っている女性の知恵と、男がかっこよくなるなる方法が必要だ。

「谷口がっこそば」という学校を食堂にしたところを手伝っているときに、女性がたくさんのことを背負って生きていることがわかったなあ。

食堂の設立に一生懸命になったお母さんがやっと給料２万円をもらった時、半分の１万円をおばあちゃんにやってたんだなあ。それまでそのおばあちゃんは、「地域づくりにだまされているんだ。やめろ」って言ってたらしいんだね。ぼくは知らなかった。でもね、給料をもらったその日から、がんばれよって、そのおばあちゃんは言うようになったらしいんだね（笑）。

いっぱい背負っている女性の知恵が必要だね。そしてそれを応援する男がいるといいね。男はさ、金は心配するなって言ってあげなさいよ。男がかっこよくなる方法だよね。

（結城登美雄さんのお話より覚え書き）

連絡会参加者コラム

先生は、少しでも田麦山に貢献したいと何度もおっしゃっていました。ありがたいことです。

桜井マサノ

一月二十八日、結城先生の講演会がJA田麦山支所の二階で行われました。三時半から、「どうする田麦山」ということで経験されたこと、そしてアドバイスを一生懸命にお話をして下さいました。

夢を抱く心温まるとても楽しいひと時でした。みんなで意見を出し合い大きな仲間の力で立ち上がる。そこに素晴らしい地域ができあがり、活性化につながると熱意あるお話でした。好評だったので二度目をお願いしたとのことですが女性は三人程でした。

何故？　もう少し多くの方々が集まらなかったか少し残念に思いました。

現実は厳しいと思いますが講演を聞くだけだけでもいいじゃないですか。実行できなくても、夢を見るだけでもいいじゃないですか。私はお茶飲みをしながら語り合おう。そして少しづつ前に進んでいこうと思いました。

五時から公民館で各家庭が持ち寄って下さった一品料理を囲んで、懇親会が始まりました。先生は、少しでも田麦山に貢献したいと何度もおっしゃっていました。本当にありがたいことだと、私は思いました。

編集後記

今号で、田麦山プロジェクト通信の発行は終了です。田麦山地区連絡会が進めてきた田麦山復興デザイン策定事業は、一旦締めくくり、次はいくつかの反省点をクリアした体制で、先導事業に手を挙げる予定です。

始まりは、東日本大災害が起こった昨年の三月でした。ちょうど一年。このプロジェクト通信の役割は、田麦山復興デザイン策定事業として動き出した「田麦山に夢と誇りをつくる500人プロジェクト」の進行状況を田麦山全戸に向けてお伝えすることと、田麦山に興味関心を抱いてくださっている方々への報告を狙いに発行を続けてきました。

田麦山のまちあるきで撮影した写真は、とっても気持ちがいい風景と、とってもおいしい持ち寄り料理が心に強く残りました。おいしい田んぼ（土が美味しいらしいのです）の撮影も心に残っています。とっても美しいものでした。これは都市部では感じることができないものだと思います。

この資源を使っていかにみんなの拠点づくりにつなげられるか。その実践が、次のステップだということですから、田麦山プロジェクト通信もただここでハイ終わりというわけにはいきません。

形は変りますが、田麦山の人たちと一緒になって、いや田麦山の人たちが主体になって編集作業を進める形に転換して、このプロジェクト通信編集は引き継がれるものになる予定です。

実のある編集は、余計なものを省く引き算が必要。体制も田麦山全体としてスリムな方向がいいですよね。みんなの力を合わせる形にしたいと思いますので、またよろしくお願いします。